



この方の名前を見たとき、はじめ冗談かと思った。芸名とはいえ住所が名字というのは、珍しい。当時は、なぜか、わりと普通に受とめられていたらしいけど。私はこの歌手を、テレビで見た記憶はない。ユーチューブ等にアップされた5、6曲を聴いてみたら、きちんとした歌唱で声も魅力的。歌謡曲歌手の位置づけのようだけど、レコード盤の写真を含めて、ジャズのテイストがよく合う感じの方である。聴き比べて、歌謡曲については、藤山一郎のほうが上手いと思うけど、ジャズについては三丁目のほうが自由な自在さがあり、より自然な感じがする。

あの娘あの街 思い出悲し 泣いて別れた あの宵は 三日月淡い 春の宵 今も臉に 甦る---

(収集プロフィール)

三丁目 文夫 (1915~) 山形県鶴岡市出身。武蔵野音楽学校中退。ムーランルージュの役者兼歌手。昭和14年(1939)に歌手デビュー。戦後しばらく1950年前後まで、活動。

*「日本の歌謡曲(その四)戦前戦後のジャズ・ソング(SP編)」より「ベニイ・セレナード」三丁目文夫、灰田勝彦系のクルーナボイスで、淡々としかし情感込めて歌ってます。藤山一郎よりもうまい。この曲は曲の早さが、なんともいえずいいです。ゆったりとした流れで間奏になってまた歌。次の間奏はテンポアップ。間奏も終わりに近づきましたテンポダウンして終わりを迎える。メロディーの流れるカンジ。この曲は、イギリスのアル・ボーリー、ジェラルド楽団、アメリカでのエディ・ハワード、サミー・ケイ楽団など多くのレコードがあり、日本では宝塚の小夜福子と草笛美子が歌ったそうで、非常に愛された曲のよう。他に彼の歌ってる歌で、僕の知ってるのは「洋灯の下で」「晩秋旅情」。「洋灯の下で」は城山一夫というひとの曲なんですが、佐々木俊一メロディーに近いというか、「東京ラブソディー」と「鳴くな小鳩よ」を足して2で割ったカンジの歌になってます。「晩秋旅情」は阿部武雄っていう人の曲なんですが、ベニイ・セレナーデほど洗練されたカンジは受けません。まあ、「泥臭い蘇州夜曲」。(三丁目氏は、ムーランルージュの役者兼歌手。デビューは昭和14年ですが、その以前からアルバイト的な歌謡曲の吹き込みはされています。ポリドールには、作曲家兼歌手として入社。親友の北廉太郎の死後にその路線を引き継ぎました。本名は城山一夫で、その名前での作曲作品が戦後まで見られます。一時、母里文夫と改名し「ガード下の女」などを吹き込みましたが、ポリドール自体が左前であったため、新宿で牛飯屋「なんどきや」の経営者に転身しました。そのお店は20年近く前にやめておられますが、森繁久弥なども通ったとか。)

主な曲

ベニイ・セレナード 1941

雨の天城路 (松坂直美作詞・若倉晴生作曲)

あの娘あの街 1947 (飯塚まゆみ:作詞 城山一夫:作曲)

1950年、発売。この曲には、チャップリンの映画「キッド」の影響が窺える。戦後の日本の子供と、映画のなかの浮浪児。それが、ダブって見えるのだ。

歌も楽しや 東京キッド 粋でお洒落で---右のポッケにゃ夢がある 左のポッケにゃチュウインガム 空を見上げりゃビルの屋根---

はじめの10秒くらいで、この唄の楽しさに引きこまれる。空を見たくなったら、ビルの屋根に登り、マンホールにもぐったり。この唄のなかのキッドは、縦横無尽に街のくらしを楽しんでいる。けれど、当時の子供達の現実は、そんな甘いものではなかったろう。映画のキッドのように、暗く汚く、惨めであったに違いない。作詞の藤浦洸は、もちろんそんな事は百も承知。あえて、明るく楽しく描いたのだ。その意図はよく判らないが、たぶん戦後の混乱と荒廃が残る世に、せめて明るい唄を送ろうと考えたのだろう。楽しげに唄うひばりの歌唱の力で、この唄は大きな命を持ち、多くの人を慰めたに違いない。

(収集プロフィール・3)

病魔との闘い

1987年4月、公演先の福岡で倒れ緊急入院、慢性肝炎及び両側大腿骨骨頭壊死と診断され、8月まで福岡市内の病院にて療養。8月3日に退院し、10月に行われた新曲『みだれ髪』のレコーディングより仕事に復帰。1988年4月11日には開場間もない東京ドームにて「不死鳥コンサート」を実施。脚の痛みにも耐えながら計39曲を熱唱し、完全復帰であることをファンにアピールした。

昭和天皇崩御により、元号が昭和から平成の時代へと変わった1989年初頭には、人気作詞家・秋元康が作詞、見岳章が作曲した『川の流れのように』を発表する。しかしこの時の美空ひばりはまるで水の中で歌っているようなほど、肺は病に冒されていた。3月には、ニッポン放送での10時間の特集番組へ生出演した。そのラジオ生放送終了直後、体調が急変したために、順天堂医院に再入院する。このため、同年4月に予定されていた、横浜アリーナでのこけら落としコンサートや、その他の全国ツアーも全て中止となった。そして、復帰の夢を果たすことなく、同年6月24日、間質性肺炎による呼吸不全のため、昭和の時代と共に生きた戦後歌謡界の大スター美空ひばりは生涯のレコーディング1500曲・オリジナル楽曲517曲の『唄』、輝き・唄うスクリーンの中の『ひばり映画』を残して死去、まだ52歳の若さだった。墓所は横浜市港南区の日野公園墓地にある。

昭和の代表する歌手として

死後の1989年7月、長年の歌謡界に対する貢献を評価され、女性として初めてとなる国民栄誉賞を受賞し、息子の加藤和也が授賞式に出席した。

美空ひばり亡き後も続くエピソード

福島県いわき市塩屋崎 美空ひばり遺影碑、コモンズ画像1988年、福島県いわき市塩屋崎を舞台に作詞されたのが縁で、「みだれ髪」の（結果的にこれが最後のレコーディング曲となった）歌碑が建立された。ひばりの死後ここを訪れるファンが増え続け、1990年に新たなひばり遺影碑が立てられ、周辺の道路420m区間もいわき市が整備を行い「ひばり街道」として1998年に完成した。さらに2002年には幼少期のひばり主演映画「悲しき口笛」のひばりをモデルにした銅像も建立

になった。現在は毎年約30万人のファン・観光客が、ひばりを偲んで訪れる。

2005年公開の映画『オペレッタ狸御殿』（鈴木清順監督）では、デジタル技術でスクリーンに甦りオダギリジョーやチャン・ツイイーと共演した。

死後10数年を経た現在も尚、日本を代表する伝説的ボーカリストとして多くのアーティストやタレントに影響を及ぼし、企画盤や未発表曲が定期的に発表、ビデオ上映コンサートも開催されるなど、永遠の歌姫として根強い人気を獲得している。

ひばりの作詞

彼女が作詞し、生前に曲がついたものは22曲ある。そのうち18曲は自ら歌い、『ロマンチックなキューピット』『真珠の涙』などの作品はシングル発売された。

1966年に『夢見る乙女』を作詞し、弘田三枝子へ提供した。『十五夜』『片瀬月』『ランプの宿で』の3曲は島倉千代子に提供された。

草原の人（生前にひばりが書き残した詩）を元につんくが作曲し松浦亜弥が歌った。

代表曲・シングル売上

柔(1964年) - 180万枚

川の流れのように(1989年) - 150万枚

悲しい酒(1966年) - 145万枚

真赤な太陽(1967年) - 140万枚

リンゴ追分(1952年) - 130万枚

みだれ髪(1987年)

港町十三番地(1957年)

波止場だよ、お父つあん(1956年)

東京キッド(1950年)

悲しき口笛(1949年)

（日本コロムビア調べによる）

主な出演映画

悲しき口笛(1949年、松竹)

鞍馬天狗 角兵衛獅子(1951年、松竹)

リンゴ園の少女(1952年、松竹)

ジャンケン娘(1955年、東宝)

べらんめえ芸者(1959年、東映)

主なシングル作品

河童ブギウギ(1949年)

悲しき口笛(1949年)

東京キッド(1950年)

越後獅子の唄(1950年)

私は街の子（1950年）

あの丘越えて(1951年)

お祭りマンボ(1952年)
津軽のふるさと(1952年)
リンゴ追分(1952年)
ひばりのマドロスさん(1954年)
伊豆の踊り子(1954年)
波止場だよ お父つぁん(1956年)
港町十三番地(1957年)
車屋さん(1958年)
哀愁波止場(1960年)
ひばりの佐渡情話(1962年)
哀愁出船(1963年)
柔(1964年)
悲しい酒(1966年)
真赤な太陽(1967年)
芸道一代(1967年)
人生一路(1970年)
ある女の詩(1972年)
一本の鉛筆(1974年)
おまえに惚れた(1980年)
裏町酒場(1982年)
しのぶ(1985年)
愛燦燦(1986年)
みだれ髪(1987年)
川の流れのように(1989年)

この曲は、美空ひばりの全オリジナル曲のなかで、その人気度は、25位前後であろう。これは、ひばりがまだ存命中、あるテレビ局（日本テレビ？徳光が司会していた）が実施したアンケート結果からの推定である。そのときは、27位くらいだったが。もうひとつの、初期の頃の名曲「青い海原」が、20位前後だったと思う。

ヨコハマを舞台にした、お得意のマドロスもの。子供の頃、この唄がラジオや商店街から流れてくると、私はすぐに、青い海と、明るい洒落た港町を脳裡に描いた。

紅いランプが マストに灯りゃ 南京街に 夜がくる---散るよ散る散る 木蓮の花 いとしい人の---船は出てゆくメリケン波止場 けむりが白く---

大人の恋愛感情は、まったく分からなかったが、別れてゆくことの切なさや、甘い痛みは、ほのかに感じられて、心に残った。この唄は、明るく素敵な恋を描いた、現在までの全大衆歌謡のなかで、常に上位をキープする価値をもった唄であると思う。

（収集プロフィール 1）

美空ひばり（1937（昭和12年）5月29日 - 1989（平成元年）6月24日）は、数々のヒット曲を歌い、銀幕スターとして多数の映画に出演した、昭和の歌謡史を代表する日本の歌手であり、女優。死後、女性として初の国民栄誉賞を受賞した。横浜市磯子区滝頭出身。愛称は御嬢（おじょう）。精華学園高等部卒業。本名は加藤和枝（かとうかずえ）。

略歴

幼少期から三人娘の時代

神奈川県横浜市磯子区滝頭の魚屋で父・加藤増吉、母・喜美枝の長女として生まれた。幼い頃より歌の好きな両親の影響を受けひばりは歌謡曲・流行歌を唄うことの楽しさを知る。

1943年6月、第二次世界大戦の戦時中に父・増吉が出征となり壮行会が開かれ、ひばりは大好きな父を思い『九段の母』を唄った。壮行会に集まった者達がひばりの歌に感銘し、涙する姿を目の当たりとした母・喜美枝は、ひばりの歌唱力に人を引き付ける可能性を見出して、地元の横浜近郊からひばりの唄による慰問活動を始める。

終戦間もない1945年、喜美枝がひばりを引き続き唄わせるために八方手を尽くし、私財を投じて自前の「青空楽団」を設立。近所の公民館・銭湯に舞台を作り、ひばり8歳のときに美空和枝の名で初舞台を踏む。

1946年、NHK「素人喉自慢」に出場し、『リンゴの唄』を歌うが、鐘一つで不合格。同年9月、横浜市磯子のアテネ劇場で初舞台。

1947年、横浜の杉田劇場に漫談の井口静波、俗曲の音丸の前座歌手として出演。以来、この一行と地方巡業するようになる。

1948年2月、ひばりは神戸松竹劇場に出演し、山口組三代目田岡一雄に挨拶に出向き、気に入られる。同年5月、浪曲歌謡漫談で有名な川田義雄（のちの川田晴久）にその才能を見込まれ、川田一座に参加。（ひばりは師匠といえるのは父親と川田先生だけと後に語っており、こぶしは川田節から学んだと言う）そこで当時のスター歌手笠置シズ子の物真似（歌真似）が非常にうまく

ベビー笠置といわれ拍手を浴びる。純粋に「かわいい」と見る層と同時に、「子供が大人の恋愛の歌を歌うなんて」という違和感を持つ層も存在した。詩人で作詞家のサトウハチローが「近頃、大人の真似をするゲテモノの少女歌手がいるようだ」と、批判的な論調の記事を書いたことは有名。ひばりはこの記事長く保存しサトウに敵愾心を持っていたと言われるが、後にサトウと和解している。同年9月、喜劇役者・伴淳三郎の劇団・新風ショウに参加し、同一座が舞台興行を行っていた横浜国際劇場と準専属契約を結ぶ。この時、演出していた宝塚の岡田恵吉に母親が芸名をつけてくれるように頼み、美空ひばりと命名してもらう。横浜国際劇場の支配人だった福島通人がその才能を認め、マネージャーとなり、舞台の仕事を取り、次々とひばり映画を企画することに成功する。

1949年1月、日劇のレビュー『ラブ・パレード』（主役・灰田勝彦）で笠置の『セコハン娘』、『東京ブギウギ』を歌い踊る子供が面白がられ、3月には東横映画『喉自慢狂時代』（大映配給）でブギウギを歌う少女として映画初出演。8月には松竹『踊る竜宮城』に出演し、主題歌『河童ブギウギ』でコロムビアから歌手として正式にレコードデビュー(7月30日)を果たす。続いて『悲しき口笛』が大ヒット。同名の映画も松竹で製作され、わずか12歳で映画主演を果たした。1950年、川田晴久と共に二世部隊記念碑建立基金募集公演のため渡米。帰国してすぐに二人の主演で『東京キッド』に出演。同名の主題歌もヒット。

1951年、松竹『あの歌超えて』で人気絶頂の鶴田浩二が扮する大学生を慕う役を演じる。実生活でも鶴田を慕い、ひばりは鶴田をお兄ちゃんと呼ぶようになった。同年5月新芸術プロダクション(新芸プロ)を設立。代表取締役社長が福島通人、役員にひばり、川田晴久、斎藤寅次郎となる。同年、嵐寛寿郎主演の松竹『鞍馬天狗・角兵衛獅子』に杉作少年役で出演。以後これを持ち役とする。

1953年、『お嬢さん社長』に主演。喜美枝は、ひばりを「お嬢」と呼ぶようになり、その後、周りもそう呼ぶように。中村錦之助を歌舞伎界からスカウトして映画「ひよどり草紙」で共演。錦之助は翌年、東映時代劇の大スターになる。この後、新人男優はひばりの相手役となることで世間に認知され、大スターとなるジंकスが生まれる。市川雷蔵、東千代之介、大川橋蔵、高倉健らもそうである。

1954年にはNHK紅白歌合戦に初出場。1955年には江利チエミ、雪村いづみとともに東宝映画『ジャンケン娘』に出演したことを契機に、「三人娘」として人気を博した。また、松竹・東映製作映画を中心に映画にも多数出演し、歌手であると同時に映画界の銀幕のスターとしての人気を得た。

1956年、ジャズバンド小野満とスイング・ビーバーズの小野満と婚約。その後、この婚約は破棄。

1957年1月、浅草国際劇場にてファンに塩酸を顔にかけられる。紅白歌合戦に3年ぶりに出場し、渡辺はま子、二葉あき子らベテラン歌手を抑えて初めて紅組トリを務めあげ、当時のひばり・20歳の青春時代には既に芸能界に置ける黄金期を迎えていた。

1958年7月、東映と映画出演の専属契約を結ぶ。同年8月、ひばりプロダクションを設立し、役員に山口組三代目組長田岡一雄が就任。『ひばり捕物帳』シリーズや『べらんめえ芸者』シリーズ

、『ひばりの佐渡情話』（1962年）など。続々ヒット映画にも恵まれる。

1960年には『哀愁波止場』で日本レコード大賞歌唱賞を受賞、歌謡界の女王の異名をとるようになった。

「愛燦燦」「川の流れるように」と並んで、クラシック出身の歌手たちが、好んで唄う曲。確かに、歌謡曲でありながら、セミ・クラシックのような、美しくたおやかなメロディー。数多の技巧を、さりげなく凝らして、嫋嫋と朗々と唄いあげる、ひばり。他を圧倒する、歌唱力である。歌謡史研究家・長田暁二氏によると、この曲は、ひばり没後に、人気は急上昇して、表舞台によく出るようになったとの事である。

(詞・曲：米山正夫)

りんごのふるさとは 北国の果て うらうらと---晴れた日は 晴れた日は 船がゆく 日本海
いつの日も---

(収集プロフィール)

言うまでもなく、戦後最大の歴史的スーパースター、美空ひばり。彼女の存在は昭和歌謡史にとつともなく大きな足跡を残したと同時に、激動の時代を生き抜いた日本国民の数少ない心のよりどころであった。その功績は、大きい。

49年、敗戦の喧騒のさなか弱冠12歳の天才少女、美空ひばりは「河童ブギウギ」にて登場。笠置シズ子の「東京ブギウギ」を下敷きとした、このデビュー曲は残念ながらヒットに繋がらなかった。がしかし、同年公開された初主演映画『悲しき口笛』の同名テーマ曲が爆発的ヒットを記録し、一躍スターダムへのし上がる。

以降、ドメスティックな色合いの演歌歌謡楽曲を着実にヒットさせていく一方で、ジャズ/マンボ/ブルース/ロックンロール/ロカビリーなど、いわゆる洋楽テイストを大胆に導入し消化した、秀逸極まりない歌謡ナンバーを数多く世に残していった。また、50年代半ばより、江利チエミ、雪村いづみと共に“三人娘”として活躍。以後、脈々と受け継がれるイメージ戦略先行型三人編成アイドル・チームの礎となっていたのは言うまでもなからう。

89年永眠。多くの日本国民が悲しみに暮れた。

*「ファン・リクエスト集」ひばり節のコブシは、演歌とは異質の伝統的な邦楽のコブシだったと確認できる「かもめ白波」「涙の白桔梗」などが聴ける。意外なほど凝ったサウンド創りも見するはず。

*美空ひばりが歌ったリズム歌謡を集めている。笠置シズ子の真似でデビューしているだけに、彼女のビート感は逸品だ。演歌などではなく、リズム歌謡の中でひばりは再評価されるべきだし、同時にもっと評価されていい米山正夫の作品との相性の良さを確認。

「祈り」軍歌・戦時歌謡13曲+オリジナル3曲で、幼少期を戦時下に過ごした彼女の「平和」への想いをまとめた企画作。空襲など自らの悲惨な体験をベースに、死んでいった者への温かな眼差しを込めつつ、あの時代への嫌悪とある種の郷愁を見事に唄い上げている。

華の昭和名歌200 第 100 号 : トンコ節 久保幸江・楠木繁夫 (昭和26版・加藤雅夫)

ユーチューブに、いくつか動画が出ているので、リピートしてみた。昭和50年前後の映像で、にこやかに、ふくよかな着物姿で唄っている。ベースに民謡があるのかも知れないが、歌謡曲としての比重が大きい歌唱法である。コブシのよく利く、美しい高音で、素人には真似の出来ない、技量をもっている。ほかに、「お酒呑むな酒呑むなの 御意見なれど ヨイヨイ」のフレーズで有名な「ヤットン節」も、私が子供の頃、当時のメディアでよく流れていた。

(作詞：西条八十 / 作曲：古賀政男 1949年)

あなたの呉れた 帯どめの 達磨の模様が チョイト気にかかる さんざ遊んで ころがして
あとでアッサリ 潰す気か---こうしてこうすりゃ こうなると 知りつつ こうして---

(収集プロフィール)

久保幸江 (くぼゆきえ 1924年1月-) は女性歌手。

1924年 (大正13年)、日本統治下の台湾・屏東市に生まれる。

1942年 (昭和17年) 屏東高等女学校を卒業後、家族とともにシンガポールに移る。当時のシンガポールは日本占領下にあり昭南島と称していたが、家族はそこで日本軍相手の料亭を開いていた。久保はこの店で好きな流行歌を歌い、また軍の慰問にも赴き、歌を歌っていたという。

1946年、日本に引き上げた後、翌1947年、日本コロムビア社の新人歌手募集の新聞広告を見て応募、1500人の応募者の中から見事合格した。

1948年「千鳥なぜ啼く」でデビューしたが不発に終わる。民謡を歌謡曲風にアレンジした2曲目の「おこさ節」も市井の注意を引かないまま終わったが、民謡もうまくこなせる新人として社内で注目を集めた。

ところで、このころ古賀政男は「炭坑節」に興味を持っていた。古賀はこれをさらに都会的な宴会ソングに仕立て上げ、1949年、「トンコ節」として久保と楠木繁夫のデュエットとして発売させた。当初はさっぱり売れなかったが、都内、地方を問わずあらゆる営業先のステージで幾度となく一人で歌いまくったため、じわじわと売上が伸び、翌1950年には彼女の運命を決定づけるほどの大ヒット曲となった。それは松竹をして映画「初恋トンコ娘」(監督・斎藤寅次郎。柳家金語楼、川田晴久他、久保自身も出演。1951年4月20日封切)を製作せしめるほどであった。

以後「ヤットン節」、「パチンコ人生」、コミックソング「旅は楽しいシュッポッポ」などヒット曲を放ったが、1955年、日本舞踊に転向を理由にコロムビアを退職した。

1969年、渡辺はま子の勧めで歌手活動を再開。1973年、甲状腺手術で声帯を一本切除する危機に見舞われるが、懸命なりハビリと治療の末に復帰。その後は神奈川県内で歌謡教室を開きながら、テレビの懐メロ番組などで活躍を続けてた。近年は体調を崩し療養中である。

*青戸 健・HPより・2004年10月

ねんりんぴっく群馬で久保幸江さんと共演

群馬県民会館で開かれた「ねんりんぴっく群馬」に出演。「トンコ節」でおなじみの久保幸江さんとご一緒でした。「ねんりんぴっく」とは「全国健康福祉祭」の愛称。文化・健康・福祉な

どをテーマにしたイベントを通して、高齢者を中心に全国的な交流を深めようと昭和63年から開催されている催しです。

大正13年生まれの久保さんは、人間としても歌手としても大先輩。デビューから55年以上を経てなお元気で歌い続けていらっしゃる姿は、ご立派そのもの。そのはつらつとした明るさと、誰にも好かれる可愛らしさをぜひ見習いたいものと思う青戸でした。

1954年、発売。母の知人の小母さんが、この曲の大ファンで、大きな33回転のレコードを、よくかけていた。私は、その頃、10才たらずだったので、単に明るくて楽しい唄、という印象しかなかった。この唄は、私が20才を過ぎてからも、テレビや商店街、お祭りなどの会場で、よく流れていた。まさに、国民的人気を得た唄とっていい。

この唄は、いうまでもなく、歌舞伎の芝居に材をとっている。たしか、「世ハ情浮名ノ横櫛」という。

粋な黒堀 見越しの松に 婀娜な姿の---/過ぎた昔を 恨むじゃないが 風も沁みるよ 傷の跡--
-これで一分じゃ お富さん えーさ おお 済まされめえ

手拍子ソングと、言うのだろうか。まさに、宴会などのときに、皆の手拍子にあわせて、唄うのが、ぴったりの唄なのだ。カラオケのない時代に、便利で有難い曲だった、とも言える。内容も、芝居のストーリーを、そつなく纏め、滑稽なテイストのなかに、人生の深みを、かいま見せる。春日のややダミがかかった歌唱も、この曲に厚みを与えている。

(収集プロフィール)

春日八郎(かすがはちろう、1924年10月9日~1991年10月22日)日本の歌手。福島県河沼郡会津坂下町出身。三橋美智也・村田英雄らとともに、長年歌謡界をリードし、1988年には三橋、村田と共に三人の会を結成。声質・声量共に一流でその声は、今なお多くの人を魅了している。また、漫画こちら葛飾区亀有公園前派出所の両津勘吉は、春日の大ファンである。会津坂下駅前には春日の銅像が立っている。

経歴

歌手を目指し、上京。浅草でクラシックの正統派藤山一郎のステージを見て歌手に憧れる。東洋音楽学校(現・東京音楽大学)を卒業後、新宿のムーン・ルージュで活動するも、なかなかヒットに恵まれず苦しい時代をすごす。1949年にキングレコードに入社。歌手としてさらに磨きをかける。1952年に「赤いランプの終列車」が大ヒットし、活動の場が広がる。1954年「お富さん」(発売半年で50万枚、最終的には100万枚を超える大ヒット)、1955年「別れの一本杉」(60万枚の大ヒット、まだ売り出し中の船村徹を有名にさせた作品)は、春日を演歌歌手の第一人者にまで押し上げたほどの大ヒットとなった。

ちなみに代表作の一つ「お富さん」は、1978年にエポニー・ウェブによって「ディスコお富さん」としてカバーされてリバイバルヒットした。発売2週間で20万枚の売り上げ。

1991年に肝硬変で死去。享年67歳。

主な曲

赤いランプの終列車

1952年(昭和27年) 大倉芳郎 江口夜詩

雨降る街角

1953年(昭和28年) 東條寿三郎 吉田矢健治

お富さん

1954年（昭和29年） 山崎正 渡久地正信

別れの一本杉

1955年（昭和30年） 高野公男 船村 徹

街の燈台

高橋掬太郎 吉田矢健治

浮草の宿

服部鋭夫 江口夜詩

山の吊橋

横井弘 吉田矢健治

長崎の女（ひと）

1963年（昭和38年） たなかゆきを 林伊佐緒

あん時やどしや降り

矢野亮 佐伯としを

ロザリオの島

たなかゆきを 林伊佐緒

* 与話情浮名横櫛は、「お富さん」の元になった歌舞伎狂言。

歌謡曲なのだが、コミックソングとしてのテイストも十分に含んでいる。結婚して付き合いの悪くなった同僚に、呼びかける内容。それだけなのだけど、人生の機微をほのぼのと感じさせ、明るく楽しい唄になっている。日本の歌謡曲としては、珍しいタイプの曲であろう。当時、かなりのヒットだった。この曲で、特筆すべきこと。それは、唄の内容から、長年に渡って、テレビ等でパロディーの多様なコントに仕立てられ、使われていたこと。曾根史郎の「若いお巡りさん」と共に、1970年ごろまでは、よく見かけた、と思う。年代的に言って、ほとんどが消去されてしまっただろう。残念。曾根の「若い。」のほうは、その後も、クレイジーキャッツやドリフターズのコントを見たことがあるので、もう少し息が長かったようだ。

(詞：矢野亮 曲：中野忠晴)

おーい 中村君 ちょいとまちたまえ いかにも新婚ほやほやだとて 伝書鳩でもあるまいものを
昔なじみの二人じゃないか たまにやつきあえ いいじゃないか 中村君---

(収集プロフィール)

若原 一郎 (わかほら いちろう、191年8月1日-1990年7月16日) は歌手。神奈川県横浜市出身。タレントの若原瞳は養女である。

*昭和20年代の国民歌謡的な折り目正しさに、軽みを加えた青春歌謡。アメリカンポップスの影響もみられ、最初期の日本的ポップス歌手の1人だった。

*「おーい中村君」で有名な若原一郎。クラリネットが歌えばドラムが踊り、哀歌でもウェットな演歌とは一線を画したモダンな歌謡曲。「おーい中村君」と声をかけたのが「三郎君」なる人物であったこと、貴方は知っていました？

来歴・人物

1948年、NHKのど自慢で入賞。1949年、キングレコードから「船に灯がつきゃ」でデビュー。伸びのある美声に豊かな声量、歌の歯切れの良さにはデビュー当時から定評があったもののヒットが出ず、長い下積み時代が続いた。

1956年、「吹けば飛ぶよな」がヒットし一躍名が知られるようになり紅白歌合戦に初出場。紅白には1956年から1960年まで5回連続で出場している。

1958年に「おーい中村君」を発売、50万枚以上を売り上げる大ヒットとなった。

「吹けば飛ぶよな」「おーい中村君」のヒットでコミカルな曲を歌うイメージが強いものの、叙情的な「山陰の道」「少女」といったヒットも出している。また、若原が歌う昭和一ケタ～戦中歌謡、ことに軍歌は根強い人気がある。同じレコード会社の先輩で、敬愛していた岡晴夫の没後は岡のヒット曲を歌い継ぎ、テレビ/ラジオ/ステージ、ファン主催の「岡晴夫を偲ぶ会」で度々歌を披露していた。好評であったこともあり「岡晴夫を歌う」というアルバムも発売した。

昭和30年代後半以降はヒットが途切れ低迷するものの、昭和40年代の懐メロブームで再び脚光を浴び、1970年代以降は懐メロ番組の出演に加え、コメディ/バラエティ番組へも進出。「欽ちゃんのどこまでやるの!？」では未だに学校を卒業できずにいる中年の学生役に扮し話題を呼び、タレントとしての人気を得た。娘の瞳も芸能界入りし、テレビ番組やCMなどで多数競演した。またこの

頃アデルランスのCMに出演し、カツラを使用していたことをカミングアウトした。

端正な顔立ちで、自他共に認める万年青年であった若原だが、1985年頃から体調を崩し、1988年からは事実上活動を休止。1990年、肝臓癌のため、58歳で死去した。癌であることは最期まで本人には告知されることは無かった。そして闘病および抗癌剤の副作用で最晩年は声質が変わってしまっていた。遺作は1988年発売の「アカシヤ列車」。

私が子供の頃、この曲は、ラジオやテレビから、よく流れて来た。商店街が、流す音楽からも。テレビでは、この曲を使って、現在のミニ・コントのような、寸劇も、よく見かけた。今とちがって、元ネタが、限られていたので、この曲は便利だったのだろう。ただし、曾根の唄のなかで、ほかに私の印象に残る唄はない。

もしもし ベンチでささやく お二人さん 早くお帰り 日が暮れる 馬鹿な説教するんじゃないが ここらは近頃---

(収集プロフィール)

曾根 史郎 (そね しろう、1930年3月-) は、歌手。歌手協会常任理事。代表曲は「若いお巡りさん」など。旧芸名は曾根史郎。

経歴

1947年 作曲家の江口夜詩に師事。

1953年 文化放送の「東京歌謡列車」でプリンス東京に選ばれ、半年間出演。

1954年 ポリドールから「雪之丞変化の唄」で歌手デビュー。

1955年 ビクターエンターテインメントに移籍。

1956年 「若いお巡りさん」が大ヒット。

出演

巣鴨バラエティ座 (TOKYO MX、2007年5月にゲスト出演。)

主な曲

「雪之上変化の唄」 (1954)

「花のロマンス航路」 (1955)

「若いお巡りさん」 (1956)

「帰る故郷もない俺さ」 (1957)

「鳴門秘帖の唄」

「夕焼け地藏さん」

白黒テレビの時代から、昭和40年頃まで、さまざまな歌番組にときどき出演していた。私の見た、また知る限りでは。たしか、玉置宏が司会の番組にも、たまに出ていたような記憶が。洋風作りでキツネっぽい、まあまあの容姿で、たしか黒や紺、グレーなどの小振りのドレスをよく着ていた、という記憶がある。紅白にも、4、5回は出ていると思う。彼女の唄で記憶しているのは、この曲だけだけど、ごく普通の歌謡曲も、幾つか唄ってるはずだ。高音のよく出る、クラシック調の発声が特徴。唄は、かなり上手かった。三橋美智也や春日八郎、大津美子などと、ほぼ同時代で、当時は一定の人気があった気がするが、なぜかいまはほとんど忘れられている。

この曲は、ラテン調のプロローグではじまり、タンゴかジルバのような曲調をベースに、そこに日本の大衆音楽のテイストを、うまく溶け込ませた歌謡曲で、昭和歌謡として高水準である。

(作詞・横井弘 作曲：山口俊郎)

わたしの恋は 悲しい落ち葉 二度と女神は 帰らない 木枯らし---どうせ振り向く 人もない
ピエロのピエロの 泣き笑い

(収録プロフィール)

石井 千恵 (東京出身の、歌手。1936～) 昭和28年に、自由音楽院を卒業。昭和31年に、デビュー。

主な曲

「おっ母さんまだ帰れない」

「吹けよ木枯し」 1957年

「月の出ぬ間に」

「東京はうそっ八」

「流れのバラライカ」 1960年

「終点」 1960年

「花は何故咲くのでしょうか」 1959年

「おちゃっぴギター」

夜の波止場にゃ 誰あれもない 霧にブイの灯 泣くばかり おどまぼんぎり ぼんぎり
ぼんから---

ひと声で、情景を思い起させるような、美空ひばりの突き抜ける高音で、この曲ははじまる。この、はじめの2フレーズだけでも、ただならぬ世界へ、私達を導いていく感じだ。ひばりの歌唱のなかでも、最高水準の一曲といえよう。

物語的には、船乗りと港の女という、定番ものなのだが、この曲はそれらの定番を吹き飛ばして、はるかな異次元に達している。多くの日本人にとって、海や港は身近なものだが、夜になるとその表情は一変する。そこには、海の本来持つ、底知れぬ怖さが漂うのだ。それを背景に、この曲は唄われている。

この曲は、単なる恋愛の唄ではない。日本人の持つ、暗い情念が、青白く燃えているような情景が浮かぶ。唄の途中、五木の子守唄を引用している。そのことから、チラチラと窺われるようではないか。

(収集プロフィール 2)

1958年7月、東映と映画出演の専属契約を結ぶ。同年8月、ひばりプロダクションを設立。『ひばり捕物帳』シリーズや『べらんめえ芸者』シリーズなど。続々ヒット映画にも恵まれる。1960年には『哀愁波止場』で日本レコード大賞歌唱賞を受賞、歌謡界の女王の異名をとるようになった。

小林旭との短い結婚・離婚後

1962年、日活の人気スターであった俳優・小林旭と結婚し、一時的に仕事をセーブするようになる。しかし、実母にしてマネージャーである加藤喜美枝や周辺関係者が二人の間に絶え間なく介入し、結婚生活はままたまならず、またひばり自身も歌に対する未練を残したままだった。

離婚直後に発表した『柔』は翌1965年にかけて大ヒット、180万枚というひばりとしては最大のヒット曲となる。この曲で1965年、日本レコード大賞を受賞。1966年には『悲しい酒』（元々はひばりのために書かれた曲ではなく、1960年に男性演歌歌手の北見沢淳が歌った曲であった）、1967年には『芸道一代』、グループサウンズ・ジャッキー吉川とブルーコメッツとの共演で話題となった『真赤な太陽』と、彼女の代表作となる作品が次々と発表され、健在ぶりを示した。

母・喜美枝との二人三脚時代

1964年、新宿コマ劇場で初の座長公演を行い、演技者としての活動の場を次第に映画から舞台に移した。離婚後のひばりを常に影となり支え続けたのが、最大の理解者であり、ひばりを誰よりも一番上手くプロデュースする存在となっていた母・喜美枝だった。

1970年、NHK紅白歌合戦の紅組司会を担当した。

兄弟とひばりの苦悩

1973年、実弟のかとう哲也が起こした不祥事により、(哲也は、1957年、小野透の芸名で歌手デビューし、多くの東映映画に出演。1962年に引退。翌1963年には賭博幫助容疑、1964年には拳

銃不法所持、1972年には暴行で逮捕。) ひばり一家と山口組および田岡との関係が表面化、全国の公会堂、市民ホールから使用拒否される。

1970年代以降、ヒット曲には恵まれなかったが、この時代に入ると演歌や歌謡曲のほかにも軽快なポップスやリズム歌謡、ジャズのスタンダードやオペラのアリアに至るまで自らのスタイルで数多くのテレビ番組やレコードなどで発表し、歌手としての再評価を受けることとなる。来生たかお(『笑ってよムーンライト』<1983年>)、イルカ(『夢ひとり』<1984年>)等、当代の話題のアーティスト／クリエイター等とのコラボレートもしばしば行われた。

他方、1980年代に入り、実母の喜美枝、二人の実弟だった哲也と香山武彦、親友であった江利チエミらが次々と死去という悲運が続く。悲しみ・寂しさを癒すために嗜んでいた酒とタバコの量は日に日に増し、徐々に体を蝕んでいった。

この方の曲で、記憶にあるのはこの曲のみである。もっとも、俳優が本業なのだから、それでいいのだろう。この曲は、多くの有名人が、エッセイに書いたり、自己の回想シーンに取り入れて喋ったり、小説のタイトルにしたり、地味ながら、社会的にも影響を及ぼし続けている。1956年の発売だから、すでに半世紀を超えているのだが。

(作詞：佐伯孝夫、作曲：吉田正)

日暮れが青い灯 つけてゆく 宵の十字路 泪(なみだ)色した 霧がきょうも 降る---/なつかしのブローチ 肌につめたく沁みて ああ 哀愁の街に霧が降る

(収集プロフィール)

山田 真二 (やまだ しんじ、1937~2007年10月15日) は、日本の俳優、歌手。東京都出身。東洋音楽学校中退。

1954年松竹に入社し、同年公開された映画『黒い罌粟』で俳優デビュー。エキゾチックな甘いマスクの二枚目俳優として人気を集め、中川信夫監督の『夏目漱石の三四郎』、美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみの三人娘と共演した『ジャンケン娘』などに出演。また、共演した雪村いづみの勧めで1956年に発売した『哀愁の街に霧が降る』で歌手としても大ヒットを飛ばし、1959年のNHK紅白歌合戦に出場した。

2007年10月15日、間質性肺炎のため東京都文京区の病院で死去。70歳。

2008年3月28日、雪村いづみらが発起人になって偲ぶ会が行われ、梅宮辰夫や『哀愁の街に霧が降る』をカバーした山川豊らが出席した。

映画

黒い罌粟 (1954年)

夏目漱石の三四郎 (1955年)

ジャンケン娘 (1955年)

朝霧 (1955年)

若い樹 (1956年)

哀愁の街に霧が降る (1956)

ロマンス誕生 (1957)

大当り三人娘 (1957)

大当り狸御殿 (1958)

結婚のすべて (1958)

サザエさんの婚約旅行 (1958)

銀座のお姐ちゃん (1959)

テレビドラマ

白い巨塔 (1967年、NETテレビ)

この歌を、はじめて聴いた人は、驚くだろう。うねり節、というか、その独特の唄い方に、たじろぐのだ。エグイ、といって良いだろう。そのお陰で、その後、青江美奈や森進一が登場してきたときも、そう驚かなかった。昔なら、悪声といわれただろう。けれど、この曲は、巖とした名曲である。日本の田舎や、都市近郊、都会でも公園などで、容易に得られる情景。それを舞台設定にしているため、誰にも分かり易いのだ。

遠回りして 帰ろう あの鈴懸けの 並木路は 思い出の小径よ 君が---月の雫に 濡れながら
遠回りして---

最近、深夜のトーク番組を見ていたら、ロックバンドの若者たちが、カラオケで何を歌うかと聞かれて、2、3人が、この曲をあげ、驚いてしまった。発表後、50年ちかく経っているはず。この曲には、やはり、はかり知れない、魅力があるのであろう。

*菅原都々子氏は、2006年の大晦日をもって、引退されました。長年のご活躍に、謝意と賛辞を捧げたいと思います。

(収集プロフィール)

菅原都々子(すがわら つづこ、1927～)昭和・平成期の歌手。

生い立ち

1927(昭和2)年、青森県十和田市に生まれる。父は浅草オペラ歌手の河合丸目郎(まるめろう)で、後に作曲家となる陸奥明。ただ、当時の陸奥は故郷に帰って新聞記者をしていた。

9歳の時にオーディションのために一人で上京させられて、その際に古賀政男に認められたことから、「古賀久子」の名をもらい養女となる。

1937(昭和12)年-テイチクで養父古賀が作曲した『お父さんの歌時計』でデビュー、同時に実父の陸奥も作曲家として上京。

1940年-養子縁組は解消。父・陸奥のもとにもどって「菅原都々子」として再デビュー。

1945年3月-父の母校である東洋音楽学校を卒業。

*戦後は田端義夫の前座を努めながら、独特のビブラートの高音で少しずつ人気を得ていく。

1948年10月-『踊りつかれて』

1950年2月-『憧れの住む町』

1951年1月3日-第1回NHK紅白歌合戦に出場。『憧れの住む町』で先攻・紅組のトップバッターを務めた。

1951年3月-『憧れは馬車に乗って』

1951年7月-『連絡船の唄』

1951年10月-『江の島悲歌(エレジー)』

この歌は大映により映画化され、共に大ヒットとなり菅原都々子の名前は全国区となる。

1951年12月-『アリラン／トラジ』

日本に初めて韓国メロディーを紹介した曲となる。

1952年1月3日-『江の島悲歌』で第2回NHK紅白歌合戦出場。

1955年4月 - 『月がとっても青いから』

これはエレジーものが飽きられ始めたため、父・陸奥がイメージチェンジを賭けて売り出した曲。現在の市場規模の30分の1の時代、100万枚（現在の3,000万枚に相当）を売り上げる大ヒットとなり、この曲で歌手としての地位を不動のものに。

*もともと物静かな性格だったため、ステージノイローゼにかかったことから、第一線から退いて、テレビ番組やリサイタルを厳選して歌うようになる。

1955年7月 - 『木浦の涙』

1961年6月 - 『北上夜曲』

1988年 - 歌手生活50周年記念リサイタル開催。

1996年 - 歌手生活60周年記念リサイタル開催。

1996年9月 - 歌手生活60周年記念シングル『あなたが好き』

2006年 - 歌手生活70周年。記念シングル2曲リリース。

2006年8月 - 「第38回NHK思い出のメロディー」（女性司会：秋吉久美子）に生出演。大ヒット曲『月がとっても青いから』を歌い、往時と変わらない美声を披露。

2006年9月 - 歌手生活70周年記念アルバム発売。

2006年11月28日 - 『NHK歌謡コンサート』（NHK総合）に番組最後の生出演。

2006年12月10日 - 記念コンサートをヤクルトホールで開催。

2006年12月31日 - 生中継のテレビ東京『年忘れにっぽんの歌』に出演。70年に及ぶ現役歌手としての活動を卒業。今後はボランティアとしての歌手活動に切り替える。

主なヒット曲

憧れの住む町（1950年）

アリラン（1950年）

トラジ（1950年）

江の島悲歌（1951年）

連絡船の唄（1951年）

憧れは馬車に乗って（1951年）

佐渡ヶ島悲歌（1952年）

月がとっても青いから（1955年）

木浦の涙（1955年）

1956年、発売。詞も曲も、まさに日本人の琴線に触れる唄である。のっけから、三橋の哀愁に満ちた高音で、惚れてを3回繰り返し、なんらかの理由で別れていく男女を、温泉地の鉄道を舞台に、描きだしていく。

惚れて惚れて 惚れていながら ゆく俺に 旅をせかせる ベルの音 思い切れずに 来は来たが---/燃えて 燃えて過した 湯の宿に---

などの、やや刺激的なフレーズを織り込み、鎌多俊与の流麗なメロディーが哀切さを盛り上げ、走り出した列車が、男女の絆を引き裂いてゆく。

もちろん、唄のなかに、高級な哲学や人生訓があるわけではないが、大衆の胸を衝くすべてがそろっている唄、といってよい。

(収集プロフィール)

三橋 美智也 (みはし みちや、1930~1996) 日本の歌手。北海道函館市近郊の上磯町 (現・北斗市) 出身。愛称は「ミッチー」。

来歴・歌謡界の重鎮

民謡をベースにした伸びのある声で、春日八郎・村田英雄らとともに、長年歌謡界をリードしてきた。また、キングレコードの全盛期を春日八郎、若原一郎と共に築き上げ、「キング三羽カラス」「三人男」とも呼ばれた。さらに、長年の民謡の業を元に、民謡三橋流を創設。津軽三味線を演奏し、レコードも出している。門下に細川たかしらがいる。

11歳で全道民謡大会で優勝するなど、もともと民謡歌手として活動していたが、1955年「おんな船頭唄」で演歌デビューし、たちまち人気歌手の仲間入りした。1970年代後半は、今までの演歌歌手のスタイルを一新。ラフなスタイルで、若者向けのラジオ番組のDJを務め、「ミッチー」の愛称で若者にも人気を得て、周囲の度肝を抜いた。その伸びやかで高音の歌声は、今なお人気不衰。1983年には日本の歌手として、史上初めてレコードのプレス枚数が1億枚を突破する記録を打ち立てた。80年代後半には親交が深かった村田英雄・春日八郎と三人の会を結成し、演歌界の活性化を図った。ミリオンセラーは18曲。

私生活

一方私生活では昭和41年に離婚、後に再婚し子宝にも恵まれるも、晩年は家庭内暴力(妻に馬乗りで殴られる...等)に苦しみ、東京の自宅を出、大阪のマネージャー宅で暮らしていた。名義貸しをしていたホテルが倒産し、数億円の負債を抱えたこともあり、輝かしい功績とは相反するものがあった。

晩年

糖尿病の悪化も手伝い、晩年は声の衰えを隠せなかった。晩年はカツラも使っていた。このことについて、親交が深かった立川談志は「もっと年齢相応に(キーを下げたり)しても良かったのでは無かったのでは」と著書に記している。きまじめな性格でも知られ、自身のショーで歌っているときに歌詞を間違ったら「もう一度」とやり直していた(晩年はそのようなことは無くなっていたようであるが)。このような性格と私生活での心労が死期を早めたのではという声もある。

1995年10月、ゴルフの帰りに車中で意識を失い、そのまま意識が戻ることなく1996年1月8日午前11時30分、多臓器不全で大阪市阿倍野区の病院で没した。享年65。

代表曲

リンゴ村から	1956年（昭和31年）詞：矢野亮 曲：林伊佐緒
哀愁列車	1956年（昭和31年）横井弘、鎌多俊与
夕焼けとんび	1958年（昭和33年）矢野亮、吉田矢健治
あの娘が泣いてる波止場	1955年（昭和30年）高野公男、船村徹
石狩川悲歌	1961年（昭和36年）高橋掬太郎、江口浩司
おんな船頭唄	1955年（昭和30年）藤間哲郎、山口俊郎
古城	1959年（昭和34年）高橋掬太郎、細川潤一
達者でナ	1960年（昭和35年）横井弘、中野忠晴
赤い夕陽の故郷	1958年（昭和33年）横井弘、中野忠晴
星屑の町	1962年（昭和37年）東條寿三郎、安部芳明
快傑ハリマオの歌 ハリマ	1960年（昭和35年）加藤省吾、小川寛興・連続テレビ映画「快傑ハリマオ」主題歌
東村山音頭	1964年（昭和39年）土屋忠司、細川潤一・東村山市農協の依頼により制作。後に志村けんのカヴァーにより有名になる。
いいもんだな故郷は ミリオンセラー	明治製菓「カール」CMソング
古城 - 300万枚	
星屑の町 - 270万枚	
リンゴ村から - 270万枚	
哀愁列車 - 250万枚	
達者でナ - 220万枚	
夕焼けとんび - 220万枚	
おんな船頭唄 - 200万枚	
母恋吹雪 - 200万枚	
あの娘が泣いてる波止場 - 180万枚	
一本刀土俵入 - 150万枚	
石狩川悲歌 - 150万枚	
武田節 - 150万枚	
赤い夕陽のふるさと - 150万枚	
お花ちゃん - 150万枚	
男涙の子守唄 - 120万枚	
おさげと花と地藏さんと - 110万枚	
あゝ新撰組 - 110万枚	
おさらば東京 - 100万枚	

以上は歌謡曲のミリオンセラー。その他民謡では「花笠音頭」（1955）が100万枚。

1959年、発表。（作詞：高橋掬太郎、作曲：細川潤一）滝廉太郎の「荒城の月」や、最近では氷川きよしの「白雲の城」と同系の、「古城もの」といいいいだろう。日本人が、強く惹かれるテーマのひとつだ。

松風さわぐ 岡のうえ 古城よひとり 何偲ぶ 栄華の夢を 胸に追い ああ---天守閣

高橋掬太郎の詞は、完璧とっていい出来だ。擬人化した古城をメインに、連想を促す情景を、ほぼ網羅している。聴いていると、古城の情景が、ありありと浮かんでくる。曲（細川潤一）も、哀愁をおびて格調高く、テーマにふさわしく堂々としている。

（収集プロフィール）

三橋 美智也（みはし みちや、1930～1996）は日本の歌手。本名は、北沢 美智也。北海道函館市近郊の上磯町（現・北斗市）出身。愛称は「ミッチー」。

来歴・歌謡界の重鎮

民謡をベースにした伸びのある声で、春日八郎・村田英雄らとともに、長年歌謡界をリードしてきた。また、キングレコードの全盛期を春日八郎、若原一郎と共に築き上げ、「キング三羽カラス」「三人男」とも呼ばれた。さらに、長年の民謡の業を元に、民謡三橋流を創設。津軽三味線を演奏し、レコードも出している。門下に細川たかしらがいる。

11歳で全道民謡大会で優勝するなど、もともと民謡歌手として活動していたが、1955年「おんな船頭唄」で演歌デビューしたちまち人気歌手の仲間入りした。1970年代後半は、今までの演歌歌手のスタイルを一新。ラフなスタイルで、若者向けのラジオ番組のDJを務め、「ミッチー」の愛称で若者にも人気を得て、周囲の度肝を抜いた。その伸びやかで高音の歌声は、今なお人気不衰えぬ。1983年には日本の歌手として、史上初めてレコードのプレス枚数が1億枚を突破する記録を打ち立てた。80年代後半には親交が深かった村田英雄・春日八郎と三人の会を結成し、演歌界の活性化を図った。ミリオンセラーは18曲。

私生活

一方私生活では昭和41年に離婚、後に再婚し子宝にも恵まれるも、晩年は家庭内暴力(妻に馬乗りで殴られる...等)に苦しみ、東京の自宅を出、大阪のマネージャー宅で暮らしていた。名義貸しをしていたホテルが倒産し、数億円の負債を抱えたこともあり、輝かしい功績とは相反するものがあった。

1995年10月、ゴルフの帰りに車中で意識を失い、そのまま意識が戻ることなく1996年1月8日午前11時30分、多臓器不全で大阪市阿倍野区の病院で没した。享年65。

代表曲

リンゴ村から 作詞」、	1956年（昭和31年）作詞：矢野亮、作曲：林伊佐緒（以下「 作曲」の順）
哀愁列車	1956年（昭和31年）横井弘、鎌多俊与
夕焼けとんび	1958年（昭和33年）矢野亮、吉田矢健治
あの娘が泣いてる波止場	1955年（昭和30年）高野公男、船村徹

石狩川悲歌	1961年（昭和36年）高橋掬太郎、江口浩司	
おんな船頭唄	1955年（昭和30年）藤間哲郎、山口俊郎	
古城	1959年（昭和34年）高橋掬太郎、細川潤一	
達者でナ	1960年（昭和35年）横井弘、中野忠晴	
赤い夕陽の故郷	1958年（昭和33年）横井弘、中野忠晴	
星屑の町	1962年（昭和37年）東條寿三郎、安部芳明	快傑ハ
リマオの歌	1960年（昭和35年）加藤省吾、小川寛興・連続テレビ映画「快傑ハリ	
マオ」主題歌		
東村山音頭	1964年（昭和39年）*土屋忠司、細川潤一・東村山市農協	の依
頼により制作。後に志村けんのカヴァーにより有名になる。		
いいもんだな故郷は	明治製菓「カール」CMソング	
ミليونセラール		
古城 - 300万枚		
星屑の町 - 270万枚		
リンゴ村から - 270万枚		
哀愁列車 - 250万枚		
達者でナ - 220万枚		
夕焼けとんび - 220万枚		
おんな船頭唄 - 200万枚		
母恋吹雪 - 200万枚		
あの娘が泣いてる波止場 - 180万枚		
一本刀土俵入 - 150万枚		
石狩川悲歌 - 150万枚		
武田節 - 150万枚		
赤い夕陽のふるさと - 150万枚		
お花ちゃん - 150万枚		
男涙の子守唄 - 120万枚		
おさげと花と地藏さんと - 110万枚		
あゝ新撰組 - 110万枚		
おさらば東京 - 100万枚		

昭和30年、発売。(作詞：横井弘 作曲：中野忠晴)

加茂の河原に 千鳥が騒ぐ、で始まるこの歌をご存じの方は、現在50歳以上の方がほとんどであろう。たしか、映画かテレビドラマの主題歌だったと思うが。2, 3年のあいだラジオや商店街から、よく流れてきた。その後も、テレビなどから、ときどき流れていた。現在は、ほとんど聴かれなくなってしまったが。内容的には、よく知られた物語へのオマージュであり、それだけで日本人（主に50歳以上の）の琴線を掻き鳴らすものだ。同類の歌も、数多い。それらの中で、この歌が傑出しているのは、その文学性のたかさであろう。

またも血の雨 涙雨 武士と----/菊のかおりに 葵が枯れる 枯れて散る散る-----

(収集プロフィール)

三橋 美智也（みはし みちや、1930年11月10日～1996年1月8日）日本の歌手。北海道函館市近郊の上磯町（現・北斗市）出身。愛称は「ミッチー」。

来歴・生涯

民謡をベースにした伸びのある声で、春日八郎・村田英雄らとともに、長年歌謡界をリードしてきた。もともと民謡歌手として活動していたが、1955年「おんな船頭唄」で演歌デビューしたちまち人気歌手の仲間入りをした。1970年代後半は、今までの演歌歌手のスタイルを一新。ラフなスタイルで、若者向けのラジオ番組のDJを務め、「ミッチー」の愛称で若者にも人気を得て、周囲の度肝を抜いた。その伸びやかで高音の歌声は、今なお人気不衰。

記録

生涯のレコード売上1億600万枚は日本の歌手としては現在もまだ破られていない（2005年現在）。ミリオンセラーは18曲。

私生活

一方私生活では昭和41年に離婚、後に再婚し子宝にも恵まれるも、晩年は家庭内暴力(妻に馬乗りで殴られる...等)に苦しみ、東京の自宅を出、大阪のマネージャー宅で暮らしていた。名義貸しをしていたホテルが倒産し、数億円の負債を抱えたこともあり、輝かしい功績とは相反するものがあった。

晩年

糖尿病の悪化も手伝い、晩年は声の衰えを隠せなかった。晩年はカツラも使っていた。このことについて、親交が深かった立川談志は「もっと年齢相応に(キーを下げたり)しても良かったのでは無かったのでは」と著書に記している。きまじめな性格でも知られ、自身のショーで歌っているときに歌詞を間違ったら「もう一度」とやり直していた(晩年はそのようなことは無くなっていたようであるが)。このような性格と私生活での心労が死期を早めたのではという声もある。1995年10月、ゴルフの帰りに車中で意識を失い、そのまま意識が戻ることなく1996年1月8日午前11時30分、多臓器不全で大阪市阿倍野区の病院で没した。享年65。

代表曲

リンゴ村から

1956年（昭和31年）詞：矢野亮 曲：林伊佐緒

哀愁列車	1956年（昭和31年）横井弘、鎌多俊与
夕焼けとんび	1958年（昭和33年）矢野亮、吉田矢健治
あの娘（こ）が泣いてる波止場	1955年（昭和30年）高野公男、船村徹
君は海鳥渡り鳥	1955年（昭和30年）矢野亮、真木陽
ギター鷗	1958年（昭和33年）矢野亮、吉田矢健治
石狩川悲歌	1961年（昭和36年）高橋掬太郎、江口浩司
おんな船頭唄	1955年（昭和30年）藤間哲郎、山口俊郎
古城	1959年（昭和34年）高橋掬太郎、細川潤一
一本刀土俵入り	1957年（昭和32年）高橋掬太郎、細川潤一
男涙の子守唄	1956年（昭和31年）高橋掬太郎、細川潤一
おさげと花と地蔵さんと	1957年（昭和32年）東條寿三郎、細川潤一
達者でナ	1960年（昭和35年）横井弘、中野忠晴
赤い夕陽の故郷	1958年（昭和33年）横井弘、中野忠晴
おさらば東京	1957年（昭和32年）横井弘、中野忠晴
星屑の町	1962年（昭和37年）東條寿三郎、安部芳明

全国歌謡ベスト

テンで連続1位に、日本レコード大賞歌唱賞を受賞

その他の曲

ご機嫌さんよ達者かね
 島の舟唄
 船頭追分
 御存知赤城山
 あゝ田原坂
 玄海船乗り
 泪と侍
 縁があったらまた逢おう
 手まり数え唄
 みれん峠
 木曾恋がらす
 江差恋しや
 俺ら炭鉱夫
 東京見物
 リンゴ花咲く故郷へ
 僕は郵便屋さん
 民謡酒場
 センチメンタルトーキョー
 月の峠路
 帰る日が楽しみさ

岩手の和尚さん

笛吹峠

夢で逢えるさ

かすりの女と背広の男

たった一人の人でした

麦ふみ坊主

北海の終列車

東京が泣いている

あゝ故郷

津軽の三男坊

新撰組の唄

流れ星だよ

男の舞扇

東京五輪音頭

堀のある町

東京の鳩

鳴門海峡

さすらい船

父子星

冬の花火

I'm A 北海道 Man *1984年(昭和59年) 荒木とよひさ、かまやつひろし。没後発泡酒のCMに使用され話題を集める。

三人の会の作品

哀愁

村田英雄、三橋美智也

男のふるさと

村田英雄、三橋美智也

1952年の発表。まず曲全体に、列車が走り去っていくような、軽快なリズムがある。

白い夜霧の灯りに濡れて 別れ切ないプラットホーム...ベルが鳴る ベルが鳴る さらばと言って 手を振る君は 赤いランプの...

駅を舞台に、甘く切ない別れを描いた、古さをあまり感じさせない曲である。発表から、60年ちかくたっているのだが。はじめから終わりまで、列車が走っていくようなリズムと、警笛のような音が要所にはいる。臨場感を、さりげなく醸し出しているのだ。

私たちは快いリズムに乗って、深くはかない別れを、脳裏に描くのだ。そして、私たちも、そのまま何処かへ走り去って行くような、ふとそんな気になるのだ。

(収集プロフィール)

春日八郎(1924~1991)は、福島県河沼郡会津坂下町出身。三橋美智也・村田英雄らとともに、長年歌謡界をリードしてきた。声質・声量ともに一流で、今なお多くの人を魅了している。東洋音楽学校(現・東京音楽大学)を卒業後、新宿のムーラン・ルージュで活動する。ヒットに恵まれず、苦しい時代を過ごす。

1949年にキングレコードに入社。歌手としてさらに磨きをかける。

1952年に「赤いランプの終列車」がヒットし、活動の場が広がる。1954年「お富さん」(100万枚を超える大ヒット)、1955年「別れの一本杉」がヒット。1991年に肝硬変で死去。享年67歳。

経歴

歌手を目指し、上京。浅草でクラシックの正統派藤山一郎のステージを見て歌手に憧れる。東洋音楽学校(現・東京音楽大学)を卒業後、新宿のムーラン・ルージュで活動するも、なかなかヒットに恵まれず苦しい時代を過ごす。1949年にキングレコードに入社。歌手としてさらに磨きをかける。1952年に「赤いランプの終列車」が大ヒットし、活動の場が広がる。1954年「お富さん」(発売半年で50万枚、最終的には100万枚を超える大ヒット)、1955年「別れの一本杉」(60万枚の大ヒット、まだ売り出し中の船村徹を有名にさせた作品でもある)は、春日を演歌歌手の第一人者にまで押し上げたほどの大ヒットとなった。

ちなみに代表作の一つ「お富さん」は、1978年にエポニー・ウェブによって「ディスコお富さん」としてカバーされてリバイバルヒットした。発売2週間で20万枚の売り上げ。

1991年に肝硬変で死去。享年67歳。

作品

曲名 年 作詞 作曲

赤いランプの終列車

1952年(昭和27年) 大倉芳郎 江口夜詩

雨降る街角

1953年(昭和28年) 東條寿三郎 吉田矢健治

お富さん

1954年(昭和29年) 山崎正 渡久地正信

別れの一本杉

1955年（昭和30年） 高野公男 船村 徹

街の燈台

高橋掬太郎 吉田矢健治

浮草の宿

服部鋭夫 江口夜詩

山の吊橋

横井弘 吉田矢健治

長崎の女（ひと）

1963年（昭和38年） たなかゆきを 林伊佐緒

あん時やどしや降り

矢野亮 佐伯としを

長良川旅情

服部鋭夫 山口俊郎

ロザリオの島

たなかゆきを 林伊佐緒

私が子供の頃に、売っていた人らしいので（プロフィールによる）、テレビをよく見るようになってからは、ときどき見かけるくらいだった。ラジオや雑誌なども同様。それに、内容が大人の唄なので、いまいちピンと来なかった。その中では、やはりこの曲が心に残った。唄はかなり上手く、その声の良さは、素晴らしい。いつも笑顔で愛想も良かったが、立派な体躯で威圧感があった。

この曲は、歌謡史に残る名曲であろう。他に2、3、中ヒットがあるらしいが、あまり聴いたことがない。

（藤間哲郎：作詞、山川俊郎：作曲 1959年）

ネオンは巷にまぶしかろうと 胸は谷間だ 風も吹く 男ならばと こらえちゃみたが 恋の
痛手が 命とり---涙がじんと にじんで来たよ 俺もやっぱり---

（収集プロフィール）

三船 浩（みふねひろし、1929年9月-2005年7月8日）新潟県新井市（現・妙高市）出身の歌手。
*フランク永井ばりの低音と、朗らかなテノールを使い分ける珍しい歌唱法。ゆえに演歌よりも、ロマンティックなムード歌謡や、大らかなふるさとソングの方が合っている。ただ、やはり華やかさに欠けるのはいかんともしがたいところ。

ソフトで深い低音の持ち主だ。昭和30年代前半、ビクターはフランク永井、キングは三船浩といわれた。ここでも当時と変わらぬ魅惑のヴォイスで歌う。ことに昭和31年(1956)の暮れに発売された出世作の「男のブルース」をはじめ昭和33年(1958)にヒットした「東京だより」などは聴きもの。

フランク永井、神戸一郎などと並んで、昭和30年代の低音ブームの担い手の一人。柔道四段の猛者でどすの聴いた中々の迫力の声だった。ムード歌謡からテレビ主題歌から典型的な演歌まで幅が広がった。

1956年（昭和31年）、「男のブルース」で豊かな低音の魅力を生かし、キングレコードより歌手デビュー。その後も「さようなら故郷さん」「東京だより」「夜霧の滑走路」「黒帯の男」「サワーグラスの哀愁」「小樽の赤い灯が見える」「男の酒場」などのヒット曲を放った。1995年（平成7年）に最後の作品「大地よ」を発売するまで、526曲のレコーディングを行った。国産初の連続テレビ映画「月光仮面」の挿入主題歌（曲名：月光仮面の歌）および「豹（ジャガー）の眼」の主題歌も唄う。歌手デビュー前はNHKのど自慢（昭和26年）で新潟県代表となり関東・甲信越大会で優勝、全国大会で第3位入賞の経験をもつ。NHK紅白歌合戦において、昭和32年「男のブルース」、昭和33年「夜霧の滑走路」、昭和34年「黒帯の男」、昭和35年「サワーグラスの哀愁」を唄う。当時フランク永井・石原裕次郎と共に低音ブームを巻き起こし一世を風靡した。柔道四段の腕前で講道館の三船久蔵十段から命名。スポーツ万能、ゴルフもシングル・ハンディ。艶のある高音も特徴の一つで音域が非常に広い。軍歌もレパートリーに多数ある。

また、1991年から1995年まで、日本歌手協会の理事長職を務めていた。

2005年7月8日、心筋梗塞のため東京都府中市の病院で死去。享年75

1961年、発売。いわゆる「勝負師もの」である。けれど、この唄は、その粋をはるかに超えて、多くの日本人を、励ます唄になっている。

吹けば飛ぶよな 将棋の駒に かけた命を 笑わば---月も知ってる 俺らの意気地---あの手この手の 思案を胸に---

はじめのフレーズが、吹けば飛ぶよな、になっている。これは、将棋の駒のことを言っているのだが、ここで私たちは、自分の存在のこのように思ってしまう。伝説の棋士、坂田三吉をモデルにした唄は、数多いが、この唄は、やはり群を抜いている。その、勝負にかける意地と闘志を、見事に描きだし、力強い曲調が、私たちに勇気づけてくれる。村田の歌唱も、男歌の手本のように、素晴らしい。

(収集プロフィール)

村田 英雄 (むらた ひでお、1929年1月17日～2002年6月13日) 演歌歌手。佐賀県東松浦郡相知町(現唐津市)出身。愛称は、ムッチー。

7歳で九州の大物浪曲師酒井雲門下に弟子入りした。酒井雲坊と称し、25歳で村田英雄に改名した。天才浪曲師として上京し、古賀政男に見出され1958年"無法松の一生"で歌手デビューしたが、当初はヒットに恵まれず、「百姓をした方がましだ。」と言って九州へ帰ってしまったこともある。だが3年後の1961年、西条八十作詞船村徹作曲の王将が大ヒットを記録し、"無法松の一生""人生劇場"なども徐々に注目され始め、大御所の仲間入りとなった。その後もドスのきいた重々しい歌唱で、男の世界を歌いあげた。長年三橋美智也、春日八郎らと演歌をリードし、1988年にはこの二人と三人の会を結成し活動した。60年代後半は東映任侠映画の主演スターとしても活躍した。

*食生活は好ましいものではなく、野菜嫌いの肉好きな上に大の酒豪であった。1972年から1973年にかけて糖尿病のため一時入院し、その後1996年、糖尿病悪化のため右足切断、2000年、左太もも切断。2002年6月13日、肺炎のため大阪市内の病院で死去。享年73歳であった。

2004年5月23日には地元の有志により故郷の佐賀県相知町(現唐津市)に村田英雄記念館がオープンした。館内では、遺品の展示や、楽屋の再現コーナー、生前に愛用していたマグカップでコーヒーが頂ける喫茶や出演映画の放映など今は亡き村田英雄の全盛期の様子がうかがえる。

紅白歌合戦への出場

NHK紅白歌合戦には1961年に初出場、以降'80年代に入っても、発売する曲はほとんどオリコンランキングにチャートインするなど根強い人気を見せ、1989年までに通算27回の出場を果たした。中でも王将は4回歌われた。

三波春夫との関係

村田と同じく浪曲出身の大物演歌歌手三波春夫。歌番組での競演は恒例であった。有名であった彼と村田の不仲説は、世論が作り出した偏見に近いものがある。村田は三波を先輩歌手として

慕い、ゴルフや食事を共にする仲であり、何度か喧嘩はあったが、（上手・下手事件など。上手のエピソードを参照のこと）実際は良きライバルとして互いに意識していた程度であり犬猿の仲というほどのものではなかった。村田は人物や男心一筋に演歌を歌い続ける保守派であったが、三波は後年ラップに挑戦するなど常に革新派であった。歌への考え方やスタイルが対照的なため、世間にライバル関係が大袈裟なものとして定着していったと思われる。

晩年の様子

1991年に前妻であった梶山ユイ子氏や、歌仲間の春日八郎を亡くした心労で糖尿病が深刻となり、体調を崩すこととなる。'95年頃より様々な合併症に襲われ入退院を繰り返すが、演歌が再び注目されるまで歌うという執念から度々復帰した。'96年の右足切断後は頭を丸め、車椅子での生活になりながらも作務衣姿で歌い続けた。

日本コロムビア在籍時代の

歌（1958年～1971年）

「無法松の一生」 1958年7月 作詞：吉野夫二郎 作曲：古賀政男 デビュー曲。

「度胸千両」 1958年7月 作詞：吉野夫二郎 作曲：古賀政男

1981年に無法松の一生と合成録音された。これが一般的な「無法松の一生〈度胸千両入り〉」であり、現在も多くの歌手にカバーされている。

主な曲

「人生劇場」 1959年4月 作詩：佐藤惣之助 作曲：古賀政男

「侍ニッポン」 1961年3月 作詞：西條八十 作曲：松平信博

「王将」 1961年11月 作詞：西條八十 作曲：船村徹 戦後初のミリオンセラー曲という説があり、この曲が村田英雄の地位を不動のものにした。

「皆の衆」 1964年7月 作詞：関沢新一 作曲：市川昭介 田園ソング。ステージのフィナーレでの手拍子もの。

「夫婦春秋」 1967年7月 作詞：関沢新一 作曲：市川昭介 歌手生活10周年記念曲。後年、有線放送でヒットし1979年には日本作詩大賞特別賞受賞。17万枚を売り上げる。

東芝EMI在籍時代の歌（1971年～2002年）

「人生峠」 1979年8月 作詞：宮原哲夫 作曲：小松原てるを 東芝へ移籍後のヒット曲。21万枚を売り上げ、続けて10年以上前に発表した"夫婦春秋"もヒットした。

映画

阿波狸合戦 1939年

旗本退屈男 謎の七色御殿 1961年

王将 1962年

人生劇場 飛車角 1963年

東海遊侠伝 1964年

三婆 1974年

ポップス系の曲としては、「恋のバカンス」「恋のフーガ」「恋のオフエリア」が3大名曲だろう。どれも、アレンジを変えれば、世界的に通用するナンバー。恋オフエは、当時なぜか中ヒットまでもいかなかったが、いま聴くと素晴らしいスパイラル・ケミカル。ぜひ、もっと多くの方に楽しんで欲しい。また、初期のカバー曲も、力強い歌唱で素晴らしい。

(詞 なかにし礼 曲 宮川 泰 1968)

幸せが大きすぎて さよならを信じられず 悲しみは夜も昼も 胸にこみあげる オフエリア
恋は命をかけた 女のまごころ オフエリア それはあなたを想う わたしのまぼろし たわむれの---

(収集プロフィール)

ザ・ピーナッツ(活動期 1959～1975)日本の元女性歌手(デュオ)、俳優。愛知県知多郡常滑町(現・常滑市)出身、同県名古屋市育ちの双子。

略歴

姉 伊藤エミ(本名、澤田 日出代(さわだ ひでよ)(旧姓、伊藤)1941年4月～2012年6月15日)、妹 伊藤ユミ(本名、伊藤 月子(いとう つきこ)1941年4月～)。子供・学生時代は同県名古屋市で過ごす。

所属はデビューより引退まで16年間一貫して渡辺プロに、レコード会社は各社の争奪戦となり、1959年4月にキングと契約。

発売したシングル、LPの累計売上は1000万枚以上に達する。

愛知県名古屋市立西陵商業高校(現・西陵高校)を2年生の時に中途退学後、主に名古屋市内などで「伊藤シスターズ」名義で歌っていた。1958年に同市内のレストランにて渡辺プロダクション社長の渡邊晋にスカウトされ上京。同社長宅に下宿しつつ宮川泰に師事し、歌唱レッスンを受ける。

1959年2月、「第2回 日劇コーラスパレード」で歌手デビュー、4月、「可愛い花」でレコードデビュー。1959年6月から1970年3月までフジテレビ系の歌謡番組『ザ・ヒットパレード』のレギュラーに抜擢。

その後1961年6月から1972年10月1日まで日本テレビ系の人気バラエティー番組『シャボン玉ホリデー』でメイン司会を務めた。

日本国外でも活躍し、『エド・サリヴァン・ショー』(アメリカ)や『カテリーナ・バレンテ・ショー』(当時の西ドイツ。現・ドイツ)、『ダニー・ケイ・ショー』(アメリカ)にも出演したことがある。

また女優活動も少ないながらも行っており、映画などにも数作出演。中でもモスラでの「小美人」役は現在もなお人気。

和製ポップスを海外公演などによって世界に広めた功績は大きく、特に当時の東西両ドイツやイタリアでは、日本の歌手と言えば即座に「ザ・ピーナッツ」と連想されるほどの活躍振りも高く評価された。

姉の伊藤エミは1975年6月4日に同じ所属事務所であった元・ザ・タイガースの沢田研二と結婚し、ハナ肇宅の隣に居を構えていた。その後1男を出産するが、1987年1月に離婚。

二人が奏でるハーモニーとメロディは美しく温かく、抜群の歌唱力を持つ。ザ・ピーナッツ以降、数多くの双子歌手がデビューするが、ザ・ピーナッツ以上の音楽的才能を持った双子歌手は現れていない。今も数多くのファン及びザ・ピーナッツの現役時代を知らない世代を含めた各年齢層に、その歌声は愛され続けている。

2012年6月15日に姉：伊藤エミが永眠した。

歌のパートは、ハーモニーが姉の伊藤エミ、メロディーが妹の伊藤ユミで歌うのが通常のパターンである。

主な楽曲

可愛い花（デビュー曲）／南京豆売り（1959年4月）

キサス・キサス／チャッキリ・チャ・チャ・チャ（1959年6月）

情熱の花（歌詞は2種類存在している、オリジナルはカテリーナ・ヴァレンテ）／米山さんから（1959年9月）

乙女の祈り／ばってん、ばってん、ばってんてん（1960年2月）

悲しき16才（オリジナルはキャシー・リンデン）／心の窓にともし灯を（1960年4月）

月影のナポリ（森山加代子との競作、オリジナルはイタリアの歌手ミーナ・マッツィーニ）／白鳥の恋（1960年7月）

ジングル・ベル／サンタクロースがやってくる（1960年10月）

いつも心に太陽を／山小屋の太郎さん（1962年3月）

ふりむかないで（後にWink、松雪泰子がカバーする。またハニー・ナイツの同タイトルの曲とは全く別のもの。ザ・ピーナッツ初のオリジナルヒット曲）／アテネの恋唄（1962年3月）

君去りし夜／あなたなんかもういや（1962年4月）

夕焼けのトランペット／ローマの恋（すぎやまこういち初のザ・ピーナッツソング作曲）（1962年5月）

祇園小唄／深川くずし（1963年1月）

恋のバカンス（後に田中美奈子、W（ダブルユー）がカバーする）／チャオ（1963年4月）

キャンディームーン／ドミニク（1964年4月）

ジューン・ブライド／ほほにかかる涙（1964年5月）

ウナ・セラ・ディ東京（和田弘とマヒナスターズ、西田佐知子、坂本スミ子との競作。『東京たそがれ』を再アレンジ・改題）／知らなかった（1964年9月）

かわいい小鳥／ブルーレディーに紅バラを（1965年8月）

ローマの雨／銀色の道（ダークダックスとの競作）（1966年10月）

恋のフーガ（後に小柳ゆき、W（ダブルユー）、GO!GO!7188がカバーする）／離れないで（1967年8月）

恋のオフエリア／愛のフィナーレ（1968年2月）

恋のロンド／愛への祈り（1968年6月）

大阪の女／青白いバラ（1970年9月）

なんの気なしに／北国の恋（1971年5月）

サンフランシスコの女／ロンリー香港（1971年10月）

リオの女／恋のカーニバル（1972年3月）

さよならは突然に／夜行列車（1972年9月）

指輪のあとに／最終便（1973年2月）

情熱の砂漠／あの時、もし（1973年7月）

気になる噂／ひとり暮らし（1974年1月）

愛のゆくえ／さよならは微笑んで（1974年4月）

お別れですあなた／季節めぐり（1974年9月）

浮気なあいつ／よこがお（1975年3月）

モスラの歌（後に1992年にコスモス（今村恵子&大沢さやか）、1996年に小林恵&山口紗弥加、2003年に長澤まさみ&大塚ちひろがカバー。1961年、東宝映画「モスラ」挿入歌でシングルカットされたのが公開17年目の1978年）／インファントの娘（1978年5月）

シングル以外

ポカンポカン（二人の四季・梓みちよとの競作）

砂に消えた涙（弘田三枝子、伊東ゆかりなどとの競作）

オー・シャンゼリーゼ

スター・ダスト

白い恋人たち（1968年グルノーブルオリンピックの同名記録映画主題曲の日本語訳歌唱）

昭和フォーティーズ～ザ・ピーナッツ・オン・ステージ（ヒット曲や洋楽カバーなどを収録したライブ版、1972年）

NHKの『みんなのうた』

バルーン之歌

花

パパはママが好き

ずいずいずっころばし

*NHK紅白

1959年（第10回）から引退前年の1974年（第25回）まで16回連続で出場。実の兄弟・姉妹としては史上初めて出場。また、兄弟・姉妹による16回連続出場。

1959年（第10回） 情熱の花

1960年（第11回） 悲しき16才

1961年（第12回） スク・スク

1962年（第13回） ふりむかないで

1963年（第14回） 恋のバカンス

1964年（第15回） ウナ・セラ・ディ東京（1度目）

1965年（第16回） ロック・アンド・ロール・ミュージック

- 1966年（第17回） ローマの雨
- 1967年（第18回） 恋のフーガ
- 1968年（第19回） ガラスの城
- 1969年（第20回） ウナ・セラ・ディ東京（2回目）
- 1970年（第21回） 東京の女
- 1971年（第22回） サンフランシスコの女
- 1972年（第23回） さよならは突然に
- 1973年（第24回） ウナ・セラ・ディ東京（3回目）
- 1974年（第25回） ブギウギ・ビューグル・ボーイ

1956年、発売。この曲は、いまだに結婚式で、「ハナミズキ」「乾杯」「花嫁」「卒業写真」などとともに、よく唄われるという。発表から、50年は経っているのだが。明るく希望に満ちた内容が、おめでたい場所によく合うのだろうか。

嵐も吹けば 雨もふる 女の道よ なぜ険し 君を頼りに 私は生きる ここに---
スケールの大きな曲調、大津のおおらかな唄いぶり。聴いていると、のびのび、ゆったりした気持ちになってくる。それと、情景のはっきりと浮かんでくる歌詞。青空が、見えるようだ。

(収集プロフィール)

大津美子(おおつよしこ、1938年1月~)愛知県豊橋市出身の歌手。桜丘学園高校卒。

昭和30年デビュー。「東京アンナ」でスターの座につき、「ここに幸あり」をヒットさせた大津美子。「ここ幸あり」は国内はもちろん海外の日系人にも「日本の歌」として愛唱され、ハワイで「名誉市民賞」を受けたという名曲だ。

*大津といえば、「ここに幸あり」のような堂々たる歌いっぷりが思い浮かぶが、「東京アンナ」のよう なちょっとコミカルなアレンジで、ハスッパな女を演じる大津美子も魅力的。歌でこれだけの幅を演じられる歌手は、最近ちょっといない。

*歌い上げていく歌唱スタイルによるものは、のど自慢の定番曲だったもの。彼女の歌唱は、シャンソン やカンツォーネなどを経由した歌謡曲、といったある種のバター臭いが。スケールの大きいところが魅力。

*アルトの伸びのあるストレートな声で、男の低音路線の女声版的なところもあったが、あらためて聴くと織井繁子の線を狙っていたようにも感じられる。三船浩とともどもいかにも昭和30年代を感じさせられる歌手だ。

人物

1953年、キングレコード専属作曲家だった渡久地政信に弟子入り。この頃は、毎週土曜日に夜行電車に乗り上京し、翌日の昼のレッスンを受け帰郷するという生活を続けていた。

1955年7月、キングレコードから「千鳥のブルース」でデビュー。デビュー2ヵ月後の9月に発売した「東京アンナ」が大ヒット。

「東京アンナ」がヒットしている最中、恩師渡久地がビクターに移籍した。これにより落胆する大津にキング文芸部長だった町尻量光は、同社作曲家だった飯田三郎を紹介し、以後飯田は大津を指導することになる。

1956年、師である飯田が作曲し高橋掬太郎が作詞した同名映画の主題歌「ここに幸あり」が空前の大ヒット。ハワイ、ブラジルなどの多くの日系人の間で今日まで愛唱されている。

*NHK紅白歌合戦に7回出場している。

1980年、脳動脈破裂(くも膜下出血)により倒れるが、奇跡のカムバックを遂げた。

1995年から1997年まで社団法人日本歌手協会副会長に選出。

2005年、歌手生活50周年を迎え、記念のBOXセット「大津美子大全集」を発売。「ここに幸あり」「東京は恋人」などの往年のヒット曲をオーケストラとの共演で新録音している。

2009年12月31日、「第42回年忘れにっぽんの歌」（テレビ東京）に出演。

2011年1月14日、「懐かしの昭和メロディー」（収録は2010年12月28日、テレビ東京）に出演。

同2011年11月10日、ゆうぼうとで開催される『第38回日本歌手協会歌謡祭』に出演予定。

現在でもそのダイナミックなアルトの歌声は健在で、新曲発売や公演、テレビ出演など精力的に活動を続けている。

代表曲

東京アンナ（55年、当時流行のマンボリズムを取り入れ60万枚突破の大ヒット、シングル3枚目であった）

ここに幸あり（56年、自身最大のヒット曲にして日本のスタンダードナンバー）

青い月夜の並木路（56年）

流れのジプシー娘（56年）

いのちの限り（57年）

東京は恋人（57年、近年でも度々披露される事が多い曲）

純愛の砂（57年）

銀座の蝶（58年、リズム演歌を取り入れミリオンセラー）

白い栈橋（58年、NHKドラマ主題歌としてヒット）

東京ドライブ（58年）

空へ帰る人（59年）

忘れないで（60年）

他のシングル

形見の詩集（昭和30年、デビューから2作目）

雨にびしょり夜の街（昭和32年）

大阪の夜（昭和34年）

ハミングお嬢さん（昭和35年）

サンパウロ・チャチャ（昭和35年）

恋の糸満娘（昭和36年）

ひとり行く旅なれば（昭和37年）

紫川の白い花（昭和38年）

東京のクレオパトラ（昭和38年）

東京ローレライ（昭和38年）

女の風雪（昭和38年）

かりそめの恋（昭和39年、三条町子のヒット曲のカヴァー）

海つばめ（昭和39年、ビクター移籍第一弾）

土佐のカルメン（昭和40年、ビクター）

美しき愛のかけら（昭和48年）

夜霧のハンブルク（昭和54年）

1964年、発売。この唄は、たくさんの歌手が、歌っているけど、一押しは、この人。この唄は、歌手によって、かなり印象の変わる唄では、あるけれど。都はるみが唄えば、やや土俗的となり、美空ひばりが唄えば、スケールが大きくなり。森進一が唄えば、情念が強まり、五木ひろしが唄えば、何やら念仏風の色調に、癒しを感じ、といった風に。アン・ルイスが唄うと、どうなるのか、ちょっと知りたい。西田の場合は、洗練された都会的な情念が、基調となり、そこに絶望や、はかなさ、また哀切な希求がこめられている。

泣いた女が 悪いのか だました男が 悪いのか あせたルージュの くちびる噛んで 女が---
/あの日の夢もガラス玉 割れて砕けた---/月に吼えよか 寂しさを どこへも 捨て場の---

この唄は、現代日本の有力な若手文学者などにも、偏愛されている。すべてにおいて地味な唄でありながら、巨大な影響力をもつ、不思議な名曲のひとつ、と言っているだろう。

(収集プロフィール)

西田 佐知子 (にしだ さちこ、1939年1月～) 日本の歌手。愛称は「さっちゃん」。夫は俳優・テレビ司会者の関口宏、タレントの関口知宏は息子。

来歴

大阪府大阪市城東区生まれ。帝国女子高校(現:大阪国際滝井高校)卒業後、西田佐智子の名で歌手デビュー。それ以前には、「浪花けい子」の名で活動したこともあった。代表作「アカシアの雨がやむとき」は、60年安保当時の世相を表現するテーマ曲のように扱われ、その物憂げな歌声はニュース映像のBGMで使用されることが多くある。

1971年の結婚後は仕事をセーブし、オリジナル作品のほか歌謡曲・演歌・ニューミュージックなどのカバー作品も発表し、レコーディング活動が中心となっていたが、1982年発売のシングル「テレビを見ている女」を最後に、現在は専業主婦となっている。1990年には、作詞家としての活動があった。

この時期の多くのスター歌手はモノラルとステレオの端境期を体験しており、過去のモノラル録音曲をステレオで再録音する歌手も多かった。結婚後の1970年代後半にモノラル時代の主要曲をアルバム用にステレオ再録音したが、現在は廃盤となっている。また、現在発売されるコンピレーション・アルバムでは、モノラル録音のものはそのモノラル・オリジナル音源を収録することで統一されている。

「初めての街で」は現在も菊正宗酒造のTVコマーシャルで歌声が使用されているが、2009年にはジェロが歌うバージョンも使用された。

エピソード

「コーヒールンバ」のヒット当時、本人はコーヒーを飲む習慣がなく「(歌詞中の)モカ・マタリって何?」といった調子だったのが、結婚後は夫の影響で飲むようになった、という。

略歴

1956年「伊那の恋唄」でマーキュリーからデビュー。

1960年「死ぬまで一緒に」発売。

1961年 ギリシャ映画『日曜はダメよ』同名主題歌のスマッシュヒット、続けて外国曲のカバー「コーヒールンバ」のメガヒットで一躍その名を知られるようになる

1962年「アカシアの雨がやむとき」で村田英雄の「王将」とともに第4回日本レコード大賞特別賞を受賞。

1967年 レコード売上1000万枚突破記念曲「たそがれの恋」発売。9月30日にはレコード売上1000万枚突破記念チャリティ・リサイタルを東京厚生年金会館で開催。

1971年 関口宏との結婚を発表する。これを機に芸能活動を大幅に縮小。

1984年以降表立った活動は無いが、1990年、歌手・平井菜水のデビュー曲「めざめ」（日本テレビ系列のテレビ番組『知ってるつもり?!』のエンディング曲）の作詞を行った。

代表曲

夜が切ない（1959年11月）

一対一のブルース（1959年11月）

アカシアの雨がやむとき（1960年4月） - 1962年にかけてロング・セールスとなり、同年日本レコード大賞・特別賞を受賞。

死ぬまで一緒に（1960年） - 1973年に平山洋子（旧芸名：園江梨子、平山三紀の姉）がカバーし、リバイバル・ヒットさせている。

日曜はダメよ（1961年）

コーヒールンバ（1961年） - ザ・ピーナッツとの競作だが、ザ・ピーナッツ版とは歌詞が異なる。後年フリオ・イグレスiasや荻野目洋子らがカバーし再ヒットした。

スク・スク（1961年）

エリカの花散るとき（1962年）元々は「浜辺と私」のB面から火がつき大ヒットした。後にこちらをA面にし「灯りを消して」とカップリングされたEP盤も発売された。

故郷のように（1963年）

東京ブルース（1963年） - 淡谷のり子の同名ヒット曲とは別の楽曲

死んでもいい（1964年）

博多ブルース（1964年）

メリケン・ブルース（1964年）

ウナ・セラ・ディ東京（1964年）和田弘とマヒナスターズ、坂本スミ子、ザ・ピーナッツとの競作

赤坂の夜は更けて（1965年） - 島倉千代子との競作

女の意地（1965年） - 1970年～1971年にリバイバル・ヒット

札幌エレジー（1965年）作詞：水木かおる 作曲：藤原秀行

裏町酒場（1966年） - 美空ひばりの同名ヒット曲とは別の楽曲

信じていたい（1966年）

雲の流れに（1967年）

涙のかわくまで（1967）

愛なぜ哀し（1968）

夜霧のむこうに（1968）

あの人に逢ったら（1968）

くれないホテル（1969）

星のナイト・クラブ（1969）

気になるあなた（1969）

鍵をかけないで（1969年）

神戸で死ねたら（1970）

初めての街で（1979年） - 菊正宗酒造のCM曲。使用は1975年から。CMとシングルでは一部歌詞が違う。

まさに、青春ソングの名作。私も、この曲から、ずいぶん励ましと勇気を貰ったものだ。明るく、頑張っただけ、という前向きな姿勢。青春という、人生の初めての開花期、と同時に深い苦悩や、言いようのない恥辱にも襲われる年月。これは、99%以上の人に、公平に訪れるもの。神様の与える、試練、と置いていい。だから、そう自分を傷めなくていい。

君は何を今見つめているの 若い悲しみに 濡れたひとみで---街のかたすみで ひざをかかえて とどかないあの手紙 別れた夢---

(収録プロフィール)

青い三角定規(あおいさんかくじょうぎ)は、1971年に結成された日本のフォークグループ。構成メンバーは西口久美子(1950~)東京都出身、岩久茂(1949~)岐阜県出身、高田真理(1947~2006)兵庫県出身、の三名。作曲家のいずみたくが、プロデューサーとして深く関わった。1973年に解散。

概要

日本テレビ系で放送された青春ドラマ「飛び出せ!青春」の主題歌「太陽がくれた季節」が売上げ100万枚を越える大ヒットとなり(メーカー公表)日本レコード大賞新人賞を受賞、紅白歌合戦にも出場した。メンバーの方向性の違いから解散。偉大なる一発屋として広く世間に記憶されることとなった。解散後、西口はソロ歌手、女優として活動、岩久は作曲家、1979年から1989年の間は女優秋吉久美子と結婚していた。その後、二度目の結婚をするが再び離婚。現在は株式会社コミユズの取締役を務める。高田は一旦は歌手として活動も、芸能界引退、居酒屋経営者になった。

青い三角定規解散後いずみたくにより、女子高生山尾百合子、と双子の高校生高橋浄、高橋亘の三人組で「新青い三角定規」が「フィンガー5を越えるぞ!」との意気込み結成されたが短い活動だった(オリコン65位)。

西口の歌手活動との係わりで、懐メロ番組で散発的に再結成されたことがある(最近ではテレビ東京系「夏祭りにつぼんの歌」(2006年)、日本テレビ系「24時間テレビ」(2006年))。西口の歌手生活35周年を記念しての12月のディナーショーに合わせ、本格的な再結成が決まり2006年8月11日には正式に活動再開が報じられたが、同年9月11日に高田が飲酒運転で人身事故を起こし、逮捕された為、幻に終わった。

2006年9月、高田真理死去。飛び降り自殺と見られる。享年59。高田の自殺後、活動再開は白紙になっていたが、ファンからは再開の強い要望があった。また、高田の母親から西口に「素晴らしい曲がこれで聴けなくなってしまうのは寂しい。」と気持ちを伝え、これがきっかけで岩久と西口の2人で2008年1月に再結成した。

シングル

太陽がくれた季節(作詞:山川啓介、作曲:いずみたく)

*この曲は後に音楽の教科書にも掲載される。

私がかつて、勤めていたある教育機関の周囲にも、たくさんの大衆食堂や喫茶店があった。けれど、この曲の中のようにロマンチックで幻想的、な処はほとんどなく、どの店も営業利益を確保するのに必死という感じだった。まあ、当然の事ではあるけれど。その現実を横に置いて、多くの人を経験する、若さ故の心のすれ違い、ちいさな見栄や矜持。ほのかに甘く切ない、愛と別れ。これらを、ドラマのワンシーンのように美しく回想して、はかなくも重い。私の、暗い青春の時代、かなり長い間、あちこちで、この曲は流れ、唄われていたと思う。

(詞 山上 路夫 曲 すぎやま こういち 1972)

君とよくこの店に来たものさ 訳もなくお茶を飲み 過ごしたよ---/窓の外 街路樹が 美しい--

--

(収集プロフィール)

ガロ (GARO) は、フォーク・ロックグループ。メンバーは堀内護 (愛称MARK、1949~)、日高富明 (愛称TOMMY、1950-1986、故人)、大野真澄 (愛称VOCAL、1949~) の三人。ガロという名前は、当時ザ・タイガースのマネージャーで三人の世話役でもあった中井國二が自分の子供にと考えていた「我朗」からとった。

松崎しげるらと「ミルク」という名のバンドを組んでいた堀内と日高に大野が加わり結成。当初はCSN&Y(David Crosby, Stephen Stills, Graham Nash & Neil Young) のコピーバンドであった。かまやつひろしのバックバンドを経て、ミッキー・カーチスのプロデュースで、1971年にシングル『たんぽぽ』でデビュー。初期において、高橋幸宏、小原礼などがバックアップメンバーとして参加していた。

*この曲は『美しすぎて』のB面であった。『学生街の喫茶店』が人気が出たため後でAB面を入れ替えた版が発売された。ちなみにこの曲で歌詞にボブ・ディランを取り上げたため、ディランのレコードが売れたという逸話もある。なお、『学生街の喫茶店』のレコードでベースを弾いていたのは「宇野もんど」こと細野晴臣であるとされるが、この当時は日本で活動していたアラン・メリル (ジョン・ジェット「I LOVE ROCK'N'ROLL」の作者として有名) であるという異説もある。この歌の喫茶店はかつて御茶ノ水駅水道橋口にあった、音楽喫茶『丘』だと言われている。

1976年に解散。その後もそれぞれに活動を続けていたが、1986年9月20日、日高が自宅近くのマンションから転落死した。元々がCSN&Yの影響下にあったバンドであり、近年、「ソフト・ロック」というジャンルにおいて、日本のロックバンドとして再評価されている。

当時日本コロムビアのラジカセのブランドにも「GARO」というブランドが存在し、CMソングに「学生街の喫茶店」が使われていたという。

*2004年、TBSの音楽番組、「月曜組曲・風のようにうたが流れていた」の番組内で案内役の小田和正が、日高富明とのエピソードとともに「地球はメリーゴーランド」を演奏した。なお、この曲は麒麟ビバレッジの茶飲料「茶来 (サライ)」 (出演:中山美穂) のCMソングにもなっている。

*2006年11月29日には限定ボックスCDとして「GAROBX」が発売された。彼らの貴重なTV出演映像を納めたDVDも含まれているが、CSN&Yをカバーした演奏のビデオ素材に関して、原曲の作者からのクレームがあり、7月12日、そして8月下旬と二度の発売延期を経ても調整がつかなかったため、今回は残念ながら収録を断念することとなった。

シングル

たんぽぽ（1971年）

地球はメリーゴーランド（1972年）

美しすぎて/学生街の喫茶店（1972年）

涙はいらない（1972年）

君の誕生日（1973年）

ロマンス（1973年）

一枚の楽譜（1973年）

姫鏡台（1974年）

ピクニック（1974年）

ビートルズはもう聞かない（1974年）

一本の煙草（1975年）

最後の手紙（1976年）

アルバム

GARO（1971年）

GARO2（1972年）

GARO3（1972年）

GAROLIVE（1973年）

GARO4（1973年）

サーカス（1974年）

プリズム（1974年）

アルバム未収録のシングル曲を多数収録した編集盤

吟遊詩人（1975年）

三叉路（1975年）

ある短い時間を切り取って、哀愁のある花束に仕立てた、そんな感じの曲である。このままルンバが踊れる、というのも当時の社会情勢にあっていただろう。明るい曲調の多いルンバだが、この曲はなぜか、ほの暗く、哀愁に満ちている。リズムカルな曲調から、紡ぎだされる、諦念のような哀愁、が心に残る。

(詞：藤浦 洸 曲：仁木多喜雄 昭和23年)

1 このまま お別れしましょう

あなたの言葉のまま

ダリアの花びらさえも

恋の時すぎりゃ 色はさめる

ああ さめた後から

いくら泣いて泣いて 泣いてみたとして

かえらぬ 恋の終わりは

しおれた 花びら

2 それでは これでさよなら

あなたの言葉のまま

タバコのすいがらのように

道に捨てられた あたしなのね

ああ つらいけれども

いくら泣いて泣いて 泣いてみたとして

かえらぬ 恋の終わりは

はかない けむりよ

さよなら さよなら さよなら

(収集プロフィール)

仁木 他喜雄 (にき たきお、1901年(明治34年)11月14日 - 1958年(昭和33年)5月13日) 昭和期の作曲家、編曲家。北海道出身。

経歴

横浜のバンド屋(鼓笛隊養成所の意味)「睦崎」に入門してドラムを学び、ハタノ・オーケストラ、日本交響楽協会を経て、1926年(大正15年)新響(NHK交響楽団)創設時にティンパニー奏者として参加。1940年以降は、コロムビア専属として、レコーディングにおける多数の編曲と作曲で知られる。

作曲の代表作には、「めんこい仔馬」(二葉あき子、高橋祐子)、「蘇州の夜」(李香蘭)、「高原の月」(霧島昇、二葉あき子)、「別れても」、「さよならルンバ」(二葉あき子)、「若者よ恋をしろ」(中島孝)、「手っ取り早い唄」、「銀座の雀」(森繁久弥)などがある。

1958年(昭和33年)5月13日死去。享年56。葬儀の際には、二葉あき子が、ヒット曲「別れても」を嗚咽しながら歌い、その早すぎる死を悼んだ。根室本線東滝川駅前東側に、仁木他喜雄顕彰

歌碑（めんこい仔馬）がある。

昭和20年代前半には、ブルースやルンバのつくヒット曲がいくつも生まれた。昭和23年だけでも、この歌のほか、『バラのルンバ』『懐かしのブルース』『君忘れじのブルース』などがリリースされています。ルンバは敗戦後の一種開放的な明るさにマッチしたこと、ブルースは日本人本来のセンチメンタリズムを刺激したことがヒットの大きな要因だった、とあってよいでしょう。ただし、『さよならルンバ』の歌詞はセンチメンタルですね。『バラのルンバ』も二葉あき子が歌っています。両作品とも、彼女の奥行きのあるアルトが魅力でした。

*アレンジとしては服部良一と仁木他喜雄の功績は大きく、前者はオリジナル曲の妙曲を多数生み出し、後者はアレンジ、特に先端のトレンドをいち早く咀嚼して楽曲に用いるのは天才的。

*仁木のアレンジ能力は天才的で、歌唱のなっていないものでも、余りあるほどアレンジが魅力的過ぎる。この一枚を聴くと、さながら日本にもビックバンドがあたかも存在していたかと錯覚する程の出来栄え。